

# 『感性』を育てる

～幼児・児童期の墨書表現による～

平嶋 一臣

## Fostering “KANSEI”

～ Expression of Sumi writing in Childhood～

by

Kazuomi HIRASHIMA

**キーワード：墨書表現 感性 感性教育 脳生理学 脳の重層性**

### はじめに

これまで、福岡市内の小学校教師 281 名（内管理職 13 名）を対象として、「感性」認識および「感性教育」の現状について、アンケート調査を基に考察した<sup>(1)</sup>。また、文科省と教育研究者の考える「感性」の定義および認識について、小学校指導要領・保育所保育指針・幼稚園教育要領および先行研究をもとに考察した<sup>(2)</sup>。

これらの考察から、私は、これまで教育界で曖昧に捉えられがちであった「感性」の定義を、脳生理学上の「脳の重層性」とリンクさせ次のように結論づけた。

**「感性」とは、ヒトの持つ最下層感覚・下層感覚・中層感覚さらに上層感覚を段階的に充実させ、その総合力により、外界をより確かに感じ取る自分に気付くこと**

そこで、私の次の課題は、この定義を教育の場でいかに具現化するかということである。つまり、具体的な教育現場<sup>(3)</sup>でどのような教材・教具を使用し、どのような方法で学習すれば「感性教育」となり得るのか、ということにある。

そこで、本論では一昨年試みた、幼児期の書表現活動を、①さらに細かいステップを踏む ②対象を小学校児童までに広げる ということ、子どもたちがどのような「感性」反応を示すかを見る。また、そのことによる「感性教育」の成果を考察する。

今回の試みにより、幼児・児童による作品の完成度やつぶやき（小学校児童では発表内容や方法も）の中に、新たな「感性」表現が顕われるならば、これも「感性教育」に向かう具体的な方法の一つと考える。なぜなら、その姿こそ子どもたちが、自らの感覚を通し、自分の姿を、客観的に気付いている証と判断してよいからだ。

また、本論文から私は、「感性」の英訳をこれまで使っていた“sensibility”から「K

---

受理日：平成 27 年 11 月 30 日

純真短期大学こども学科 特任教授

ANSEI」とした。それは、我々日本人が「感性」という語を使用する時の語感は、米英語で言うところの「センス」では完訳できそうにない、日本人独特の感覚やニュアンスが内包されていると考えるからである<sup>(4)</sup>。

## 1 序論

ここでは、墨書表現<sup>(5)</sup>が子どもの多くの感覚を揺さぶり、「感性」育てを支援するという仮説に立ち、その実践方法の概略を述べる。

### (1) 指導から発表までの流れ

- ① 幼児・児童それぞれの対象に合わせた学習指導案<sup>(6)</sup>を作成する
- ② 幼児・児童対象に「感覚」「体験」の両面からの刺激を中心とした授業実践を試みる
  - ・ 保育園児には、自由な書線と象形文字による墨書表現を行い、その後作品に色づけなど行うことで、「書」を「絵画」的な視点で、より楽しく捉えさせる
  - ・ 小学校児童には、自分が心をこめて書くに値する、意味のある漢字1文字をあらかじめ決めさせておき、それを墨書表現させる
- ③ 作品発表の場を設定する
  - ・ 保育園児には、学園祭などの展示会で多くの人に見てもらう機会をつくる
  - ・ 小学校児童には、作品に込めた自分の気持ちを語ったり、展示方法を考えさせたりする中で、自分の姿を客観的に見つめる機会をつくる

### (2) 「感性教育」の結果についての考察

- ① 授業実践<sup>(7)</sup>の結果、子どもたちが、製作中やその後の感想で、どのような言葉を発するか、を聴き留める。
- ② ①の語あるいは語群が、どのように「感性」あるいは「感性教育」の結果と結びつくか、について考察する
- ③ 小学校児童では、作品発表の方法についても、可能な限り自分たちで考えさせ、その姿と「感性」の表われとの関連を考察する

上記3段階の指導の流れと、3段階の感性教育の考察についての方法を行うに至ったのは、これまでの調査結果による<sup>(8)</sup>。そこでは、次の6項目に集約することができた。

- ① 「感性」が豊かということは、感じる力、気付き、表現力が十分に備わっていること
- ② 「感性」を発揮する場は、芸術、スポーツ、道徳、人権など幅が広い
- ③ 「感性」は、授業中の作品の出来栄え、行動、発言の内容などから感じ取っている。また、「感性教育」の場面や時期については、次のように考えていることが分かった。
- ① 「感性教育」の場は、特定の教科領域で育つわけではない
- ② 「感性教育」は、体験活動や交流学习を行うことで効果が上がる
- ③ 「感性教育」の場は年齢に関係がないものの、効果が大きいのは児童期までと考える  
この中の「感じる力」「気付き」「表現力」「芸術」「作品の出来栄え」「行動」「発言」「特定の教科領域ではない(教科に縛られない)」「体験活動」「交流学习」「児童期以前」を、「感性」から「感性教育」へと至るキーワードとし、今回は次のような新たな試みを加え

た。

- ① 幼児にいきなり好みの象形文字を選ばせ、大きな障子紙<sup>(9)</sup>に毛筆で大書させるのではなく、その前段として 90 分間の「墨遊び」の時間を設定した（年長児にとって初の試みを、より抵抗なく進めるため。および表現活動へのステップをより細かくするため）。
- ② これまでは、墨だけでの表現に留まっていたが、今回はそれに幼児が好む色を塗ることで、視覚的に明るく絵画的な作品づくりを意図した
- ③ 小学校児童の作品は、その文字を選んだ理由、その文字に込められた願い、また、書くにあたっての意気込みなどを、より明確に自覚させた（作品が自分だけの発表に留まらず、周囲にも発信していく心の表現であることを意識させたいと考えたからである）。
- ④ 福岡市所有の『松風園』<sup>(10)</sup>の「伝統文化こども教室」では、作品を飾る場所や方法など、「茶室と書」の組み合わせを意識した新たな取り組みを試みさせた

## 2 本論

ここでは、保育園児および小学校児童を対象に行った墨書表現が、どのように子どもの「感性」を揺さぶり、「感性教育」と結びついているかということについて、①指導案②子どもの表現過程の様子③表現過程や表現終了後のつぶやき、インタビュー、発表の様子などを交え考察する。

### （１）保育園児対象の「墨書表現」（第１回目） ６月１５日

#### ① 指導案

○表現テーマ 「おおきいふでとすみをつかって『こころのもよう』を大きくかこう

○対象 純真保育園・年長５歳児

○活動内容（時間） 大きい紙に大きい筆と墨を使って自分の「こころのもよう」を表現する（90分）

#### ○ねらい

- ・ 心に浮かんだ「こころのもよう」を、体いっぱい使って表現することを楽しむ
- ・ 大きい紙・大きい筆・墨を使って自分の作品を作り、心からの開放感を味わわせる
- ・ 自分と友達との作品を見て、それぞれの違いに気づく

#### ○本時指導案

時間	幼児の活動	教師の支援・配慮事項・環境づくり
(分)	1、はじめの挨拶をする  2、今日の活動について説明をする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">             大きい筆に墨をたっぷりつけて、大きい紙に自分の好きな「こころのもよう」を書こう           </div>	○年長児 13 名とは初めての出会いなので笑顔で柔らかい雰囲気ですスタートする。 ○筆・墨・紙、それぞれの用具を紹介し、使い方について簡単に説明する。 ○墨を使った経験がない子がほとんど思われるので、墨の取り扱いについて注意を行う。また。墨独特の匂いがす

15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の心に浮かんだ模様を、自由に大きく書くよう約束する。 (○・□・△・直線・曲線などが考えられる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○筆の軸が大きすぎて自分の手に入らない場合は、両手で書くことも良いと説明しておく。</li> <li>○友達が書いているときは、自分の「こころのもよう」との違いも見るように伝えておく。</li> <li>○体の小さい子には、紙の上に乗って書かせる。</li> <li>○元気いっぱい大きく書いている子を褒め励ます。</li> <li>○乾燥のため、床に広げている新聞紙に乗ると滑りやすいので注意する。</li> <li>○次回は、色つけをするので、塗りたい好きな色を決めておくように伝える</li> </ul>
70	<ul style="list-style-type: none"> <li>3、作品づくりに取りかかる。</li> <li>・友達が書いている時は、みんなでその場を取り囲むようにして座る。 (友達は、どんな「こころのもよう」だろう?)</li> <li>・出来上がった作品は、あらかじめ用意しておいた新聞紙の上に、担任の先生に運んでもらう(あらかじめ、乾燥場所を確保しておく)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○筆の軸が大きすぎて自分の手に入らない場合は、両手で書くことも良いと説明しておく。</li> <li>○友達が書いているときは、自分の「こころのもよう」との違いも見るように伝えておく。</li> <li>○体の小さい子には、紙の上に乗って書かせる。</li> <li>○元気いっぱい大きく書いている子を褒め励ます。</li> <li>○乾燥のため、床に広げている新聞紙に乗ると滑りやすいので注意する。</li> <li>○次回は、色つけをするので、塗りたい好きな色を決めておくように伝える</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>4、次の計画を知らせる。</li> <li>・今日の作品の色塗りをすることを伝える</li> <li>5、おわりの挨拶</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○丁寧な挨拶をする。</li> </ul>

## ②「こころのもよう」制作の様子と幼児の発した言葉（ゴシック体は幼児の発した言葉）



(みんな行儀よく見学)



「よしよ、よしよ」



「ここまでかくよ、いい?」



「あ、(筆が) われちゃったあー」



(立ちあがって反対側からも)



「びゅーん」





「えいっ！あ、こぼれたあ」



「真っ黒になっちゃったあ」



(夢中で無言)



「もっとかいていい？」(はいどうぞ)



(13人の「こころのまよう」の作品群)

これらの墨書作品を、およそ1か月かけて乾燥させ、これに各自好きな色を塗った。道具として使用したのは、大小さまざまな刷毛とポスターカラーである。色を塗る時の注意として、色をできるだけ混ぜないように、また、紙の裏面から塗るように指示した。これは、発色を柔らかくまた表面の墨の線が、よりくっきりと見えるためである。色塗りにかかった所要時間は約1時間であった。出来上がった作品は次のとおりである(一部)。



「おおきなおおきなシャボン玉でーす」「はじめ、ヘビだったんだけど」「う～ん、何だかわからなくなっちゃった」



「大きなみの虫、みつけた」



(できあがりでした)



(7月10日)

## (2) 保育園児対象の「墨書表現」(第2回目) 8月20日

### ① 指導案

- 表現タイトル「むかしむかしのじをかこう (えのじのきょうしつ)」
- 対象 純真保育園・年長5歳児
- 活動内容(時間) 大きい紙に大きい筆と墨を使い、元気いっぱい大昔の字(象形文字)を書く(90分)

### ○ねらい

- ・自分の好きな昔の文字(象形文字)を、体いっぱい使って表現することを楽しむ
- ・大きい紙・大きい筆・墨を使い、作品を作り、心からの開放感を味わわせる
- ・自分と友達との作品を見て、それぞれの違いを楽しむ

- その他 象形文字については、あらかじめ一覧表のプリント<sup>(11)</sup>を渡しておき、幼児はその中から好きなものを一つ選んでおく。

### ○本時指導案

時間	幼児の活動	教師の支援・配慮事項・環境づくり
15	1、はじめの挨拶をする 2、今日の活動について説明をする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">             大きい筆に墨をたっぷり付け、昔々の字を大きい紙に力いっぱい書こう           </div> ・象形文字カードを使い、古代文字の当てっこゲームをする。 3、自分が書きたい文字を発表し合う	○丁寧なあいさつと声かけを行う。 ○幼児にとっては、形が決まっているものを書くため、初めての試みで不安があるかもしれない。そこで、ゲームをして心を和らげる(動物の象形文字を中心に、あらかじめ四つ切画用紙大のカードを作っておく)。 ○偶然、友達と同じ字を選ぶかもしれないが、それは構わない。
65	4、作品づくりに取りかかる。 ・友達が書いている時は、みんなでその場を取り囲んで座り、友達の書きぶりを見ておく。 (元気な字だね) (絵のような字だね) (○○ちゃんの字は元気だね) ・乾燥までほぼ3時間がかかると思われるので、その間の保管場所を確保しておく ・出来上がった作品は、あらかじめ用意しておいた新聞紙の上に先生に運んでもらう。	○友達が書いているときは、自分が書く字と、どこがどう違うだろうと考えながら見るように伝える。 ○順番に一人ずつ作品を書く。どの子も前回(2か月前)の「こころのまよう」で墨を使った経験があるので、今回は特に細かい注意は行わない。 ○からだの小さい子は、紙の上に乗って書かせる。 ○元気いっぱい大きく書いている子を褒め励ます。 ○床に広げている新聞紙に乗ると滑りやすいので注意する。
10	5、次の計画を知らせる。 6、おわりの挨拶	○次回は今日の作品に色つけするので、塗りたい色を決めるように伝える。 ○丁寧な挨拶で終わる。



## ② 「象形文字」制作の様子と幼児の発した言葉（ゴシック体が幼児の発した言葉）



象形文字「魚」



「どうさんのしっぽ、入らなくなっちゃった」「ここにも、太鼓、書こっ」



「う~~~~~ん」



「どこまでかいていいの？」



「うっうっう~~~~」



「ここ、お魚さんのかお」



「えいっ！ グリグリグリ」

## ③ 保育園児の「墨書作品（象形文字）」の色塗り 10月15日

前回の墨書作品を、およそ2カ月間乾燥させた後、これに、各自好きな色で色塗りを行った。道具として使用したのは、今回も大小様々の刷毛とポスターカラーである。色塗りの時の注意は、色を混ぜないこと、紙の裏側から色を塗ること、の2点である。今回も色塗りにかかった所要時間は約1時間であった。どの子もすでに経験があるだけに、作業はスムーズに進んだ。作業風景と出来上がった作品は次のとおりである（一部）。



(さあ始めるよ)



(もくもくとマイペースで)



(一心不乱に色塗り作業)



「先生、見て見て！」



「ここも塗っとこ」



「雷さんは雨の色が好きだから…」

◎ 出来上がってのインタビュー（録音中）



A児作「山」



B児作「水」



D児作「雲」

A児・・・「こんな大きい山があったらいいなあと思いました。真ん中はお父さん山です。これ（右）はお母さん山です。こっちは・・・？？？」

B児・・・「川遊びをしたいです。お魚さんがいっぱいいるといいです」

C児・・・「雨の日、ピチャピチャをして、みんなで遊びました」

D児・・・「(象形文字カードを見ていたら) 雲が蛇のように見えました。グニャグニャ (筆が動くの) が面白かったです」

E児・・・「お母さん大好きだから書きました。お母さんみたいに大きく書きました。お母さんはピンクが好きです」

F児・・・「私のうちの犬を書きました。かわいいかわいい犬です。いつも遊んでいます」

G児・・・「象さんが好きです。お鼻が長いのがかっこいいです。がんばりました」

H児・・・「力持ちの馬さんを書きました。・・・乗ってみたいです」

I児・・・「紙いっぱい書きました。お母さんに見せたいです」

④ 完成作品（一部） 10月24日・25日に行われた『純真学園祭』に出品





象形文字「犬」



象形文字「竹」



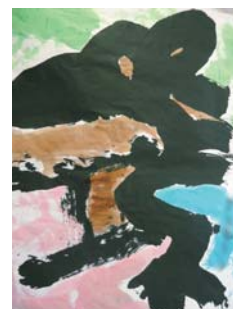
象形文字「雲」



象形文字「母」



象形文字「象」



象形文字「馬」

### （３）伝統文化こども教室の児童による「墨書表現」活動 10月10日

では次に、小学校児童による墨書表現が、どのように子ども自身の「感性」を揺さぶり、「感性教育」となり得るのか、ということについて、①指導案②子どもの表現過程の様子③表現終了後のつぶやき、インタビュー、発表会の様子を交え考察する。

ここに集う福岡市内の児童 13 名は、市が所有する日本庭園・松風園で、ほぼ毎月一回開かれている「伝統文化こども教室」に、茶道を中心に「日本の伝統文化」を学ぶために集まってきている<sup>(13)</sup>。本年度 10 月・11 月と、二回にわたる「書体験」活動の依頼が、私にあったので、純真保育園児対象に行った墨書表現の小学生版を試みた。ただしここでは「古代文字」ではなく、各自が大事にしている、意味のある漢字の一文字大書を試みた。書く漢字は、あらかじめ各自で決めておいてもらった。

#### ① 指導案

○学習テーマ「墨書表現」～自分にとって大切な言葉を筆と墨で表現しよう～

○対象 福岡市在住の児童（伝統文化体験教室に通っている 4～6 年生 13 名）

○活動内容（時間）見ても読んでも元気が出る字を書く（90 分）

○学習のねらい

- ・自分の大切にしている語（漢字一文字）を、体全体を使い元気に表現する
- ・大きい紙・大きい筆・墨を使い、自分だけの作品を創ることで、心からの開放感を味わわせる
- ・自分と友達との作品を見て、それぞれの違いや良さを分かりあう。
- ・完成した作品の展示方法を考え「松風園」の風景を生かした展示発表会を行う

○本時指導案

時間	学習活動・学習内容	指導上の留意点
(分)	1、はじめの挨拶をする ・簡単な自己紹介をし合う 2、「象形文字カード」を使って、漢字当てクイズをする。	○小学生 13 名とは初めての出会いなので 笑顔で元気なスタートをしたい。 ○それぞれの漢字には、3500 年の文化が隠されていることを、それとなく気付かせ、本日書く漢字一文字の背景を再確認させる。
1 5	3、今日の活動について説明をする。 自分にとって大切な言葉を、筆と墨で元気いっぱい表現しよう ・自分が心に決めている漢字一文字を、紙いっぱい自由にのびのびと書く（時間と乾かす場所の関係で一人 2 枚ということも、ここで説明する）。 4、作品づくりに取りかかる。 ・友達が書いている時は、みんなでその場を取り囲むように座る。 ・出来上がった作品は、あらかじめ用意しておいた新聞紙の上に運ぶ（乾燥場所の確保。茶室・茶庭・広間を汚さないよう）。 5、終わっての感想を発表しあう。	○左利きの子には、そのまま左で書いても構わないことを伝える。 ○筆の軸が大きすぎる場合は、両手で持って書くことや、手が届かないときは紙の上に乗って書いても良いことを、あらかじめ伝えておく。 ○友達と同じ漢字になることもあり得るが、それも構わないことを知らせる。 ○元気いっぱい大きく書いている子を褒め励ます。 ○友達が書いているときは、自分の作品と、どう違うのかということも考えながら見学させる。 ○自分だけでなく、友達の作品で「良かったところ」についても発表させる。
6 5	6、次の計画を知らせる。 ・かずら筆作製と作品作りを予定 7、おわりの挨拶をする	○次回は、自分で筆を作り、「もっと新しい書」作りに挑戦することを伝える ○丁寧な挨拶をする。
1 0		

## ②「墨書表現」活動の様子と児童の発した言葉（ゴシック体が児童の発した言葉）

### 『松風園』野点広場にて



（「象形文字」当てクイズ）



「うううう～～うっ」



（そこで力を抜かない！）



「よ～～～し」



(さあ、最後！)



「あ~~~~入らない！」



「……………」



「松風園」広間で乾燥中

○書き終わってからの子どもたちのひと言感想（アンダーラインは、「感性」体験により発したと考えられる言葉）

- A児・・・「はじめはドキドキしてたけど、やってみると気分が乗ってきて頑張れました」  
 B児・・・「私は、学校の習字は嫌いだったけど、書道（？）は好きになれそうです」  
 C児・・・「こんなに大きな筆を使って書いたのは初めてでしたけど、みんなが平気で書いているのを見て、自分も頑張ってみると、案外うまくいったと思います」  
 D児・・・「書き終わった後、なんだか気分がスカッとしてきました」  
 E児・・・「初めは不安だったけど、先生が横から（はみ出ていい、はみ出ていい！）と声をかけてくれたから安心して書いたらいい字ができました」  
 F児・・・「出来上がったけど、緊張しすぎて疲れました。今日は一人2枚だけだったけど、今はもっと書きたかったです。面白くなりました」  
 G児・・・「墨が飛び散ったけど、先生が（それが芸術だ！）と言ってくれたので、安心して書きました。これでもいいんだなあと思いました。後になって気持ち良かったです」  
 H児・・・「私は自分の名前から『子』という字を書きました。簡単なようで難しい字ですけど大好きな字です。将来は、子どもに関わる仕事をしたいです」  
 I児・・・「私も自分の名前の『滯』を書きました。画数が多いので心配でした。なんとかうまくできました。大切に飾っておきたいです」  
 J児・・・「書き終わって、先生が（世界に一つだけの作品だから大切にしないとね）と言ってくれたので、ずっと大切にします」  
 K児・・・「私は『命』を書きました。一番大切なものと思っているからです」  
 L児・・・「茶道教室に来ているので、『茶』の言葉が一番に浮かびました。中学生になっても茶道を続けます」  
 M児・・・「Dさんと同じで、気持ちがスカッとししました。学校の習字は、きちんと書かないといけないけど、今日の（書）は、自由に思った通りにお手本もないので好きなように書けました。ありがとうございました。またやりたいです」

このように、児童の漢字一文字に対する反応はさまざまである。しかし、A児からM児の発言中、アンダーラインの部分が、児童一人ひとりの心の底から湧き出てきた言葉であることに気づく。



人間の持つ創造的精神は、常に心（頭）の中に渦巻いている。その原点（基盤）には、やはり「感性」の豊かさがなければならない。そのためにも、幼い時からより細かく、より多方面にわたる「感性教育」の積み重ねが求められる。

### ③作品を日本庭園に生かす工夫（展示方法）



（家族を呼んでのお茶会）

（象形文字「楽」を円窓の後ろに）

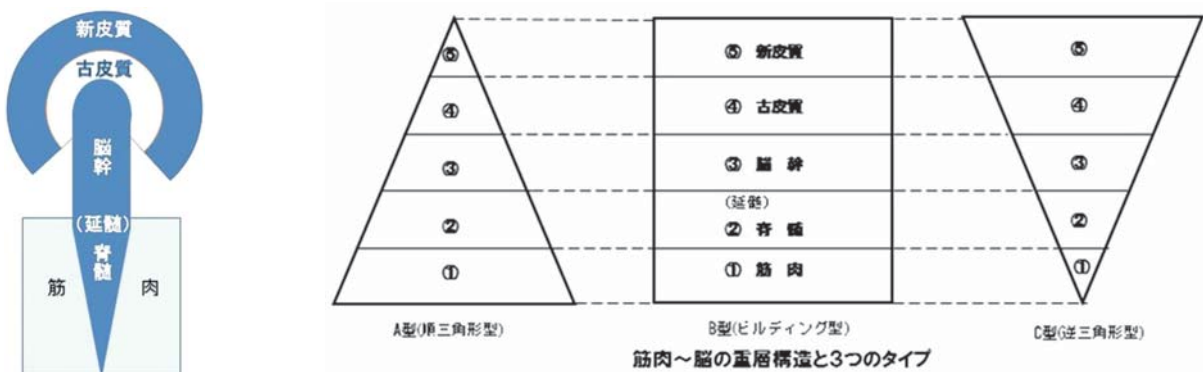
（茶庭をギャラリーにする）

作品展示については、写真のように、『松風園』運営スタッフの方々の深いご理解とご支援により、茶庭のギャラリー、茶室内での展示と、子どもたちの発想が十分に発揮できた。子どもたちの「感性磨き」「感性体験」には、このような周囲の大人たちの、幅のある深い理解があることも忘れてはならない。

今回は 11 月 28 日、今回と同じく『松風園』で、墨書表現のパート 2・『かずら筆を使ってオリジナル作品を作ろう』のプログラムで行う。江戸末期に活躍した書家が考案した「かずら筆」<sup>(12)</sup>の再現である。それを、子どもたちに追体験させ、できあがった自分の筆で、オリジナルな書作品を作るという趣向だ。13 名の子どもたちも、「筆づくり」という予告を聞いただけで、今から期待に胸を膨らませている。

## 3 結論

私の考える「感性」の定義はすでに述べた。この「定義」ができ上がっていく根拠となったのが、脳生理学的見地との融合であった。今、そのことを図示すれば次のようになる。



### 脳の重層的構造

（時実利彦著『脳と人間』より一部を平嶋が加筆）

人間の脳は、上左図のように何層もの構造になっている。私はこれを右のB型（ビルディング型）のように、下層から盤石なものに積み上げていけば、最も人間らしい姿が生まれると考える<sup>(13)</sup>。

それと同時に、「感性」もしっかりとした体験の積み重ねがあつてこそ、その人物の行動・言動が「最も人間らしい」姿として、外部に表れるものと考えている。つまり、「感性」が豊かであればあるほど、「ヒト」から「人」へと成長し、「人」（他人）のことが自分のことのように気になる人間となる。すなわち、周囲に「気付く」人間へと成長していくと考える。

己にたくましく、人（他人）に優しい人間は、「感性」が豊かだ。上の図で示すC型（逆三角形型）やA型（順三角形型）に、21世紀の子どもたちが育っていくのであれば、それこそ危機的状態である。

墨書表現中の写真下のつぶやき（気合いの声・体の底から発するうめき声にも）や、制作後の感想の声こそ、子どもたちにとって**経験に根ざした本物の姿**である。また、これがその子の将来につながる「感性教育」のベース（素地）になると言えよう。なぜなら、その一言一言は、体の深部から自然発生的に生まれ出た飾り気のない言葉であり、決して借り物の言葉ではないからだ。今後も子どもたちには、多くのそして多方面の経験を積ませ、常に筋感覚を含む脳構造の下層部から積み上げていくことで、安定した自分づくり（脳づくり）を続けていってほしい。

文科省は、中学校美術科の指導要領の中で「見る・感じる・表現することを繰り返し体験することにより感性は育つ」と言っている。乳幼児期からの五感体験を重ねていくことが、何よりも人間らしいビルディング型の自分を構築していくのである。

## おわりに

今回の墨書表現活動は、筋肉を通す活動は微少であるが、体全体を使って表現することにより、幼児も小学生も、緊張と挑戦の心の入り混る、我を忘れての表現活動となった。墨書表現後の感想で見られた、「**きつかったけどもっとやりたい**」という、学習の姿の究極を吐露してくれた言葉に、私は今ひそかな希望を抱いている。

もとより、幼児期・学童期の墨書表現という手立ては、「感性教育」の一つの方法にすぎない。今後はさらに、各教育界がそれぞれの専門性を生かし、総力で「感性教育」に邁進していってもらふことを、切に願っている。なぜなら、「**感性教育**」イコール「**人間教育**」に外ならないからである。

## 註

（1）純真紀要 No54 2013年 p57 - 70

（2）純真紀要 No55 2014年 p43 - 56

（3）「教育現場」の語は、保育園に相応しい言葉ではないが、本論では小学校教育との関連で、あえて使用する。

（4）”sennsibilyty” “sennsitivity” “emotion” “feeling” では日本語の「感性」より、むしろ「感覚」「感度」「感激」「感動」「知覚」「情緒」「感情」となる。したがって、われわれ日本人が、普段の会話や教育用語として使用している「感性」というのは、英訳でも、「KANSEI」としか表せないようだ。

（5）「墨書表現」は私の造語である。幼児・児童が大きな筆に墨を付けて、大きな紙に乗り体全部を使い表現している姿を見ると、「書写」「書道」「書アート」の呼称を充てるより、このほうがぴったりとくる。

（6）「学習指導案」の呼称は、保育園・幼稚園には相応しいとは思われないが、本論では小学校の指導案も含んで

おり、あえてこの語を使っている。

(7)「授業」という語は、幼児期には相応しくないが、本論では小学校児童含んでおり、あえて使っている。筆者としては、「支援」のつもりで使用している。

(8) 純真紀要 No55 2014 年 p55 - 56

(9) 本来ならば、画仙紙を使うところだが、幼児・小学生に「墨書表現」をさせる時は、破れにくい「引き」が強い障子紙の方が適している。

(10)『松風園』は昭和 20 年代に建設された茶室『松風庵』付きの日本庭園で、現在は福岡市が所有している。住所は「福岡市中央区平尾 3 丁目 28 番」

(11) あらかじめ配布していた「象形文字プリント」とは、次のようなものである。



(12) かずら筆は、旧小笠原藩（小倉）10 代藩主の書道師範を務めた下枝董村（1807～1885 年）が考案したと言われる。筆が貴重・高価な折、山のかずらをたたいて芯部の繊維をほぐし筆にしたものである。

(13)「脳の重層性と感性」については、感性を考える会編『感性のひらめき』に平嶋が発表（P100～104）している。

## 参考文献・図書

- 安部富士男『感性を育てる保育』国土社、1999 年
- 石井義武『勉強の仕方の研究』岩波ブックセンター信山社、1985 年
- 梅澤啓一『感性と造形表現～その発達のメカニズム～』晃洋書房、2003 年
- 片岡徳雄『子どもの感性を育む』NHKブックス 603、1990 年
- 片岡ハルコ『感性と教育』（自費出版）、1990 年
- 行場次郎・箱田裕司編著『知性と感性の心理』福村出版、2006 年
- 倉戸ツギオ『体験学習と感性教育』明治図書出版、2001 年
- 黒川建一・小林美実編著『保育内容・表現』建帛社 1999 年
- 都甲潔『感性の起源』中公新書 1772、2004 年
- 樋口 聡『新しい感性教育論』中国、華東師範大学での講演 2007 年 5 月 11 日
- 山岸美穂・山岸健共著『感性と人間』三和書籍、2006 年
- 朝日新聞社科学部編『心のプリズム』朝日新聞社、1977 年
- 感性を考える会編『感性のひらめき』紅書房、2015 年
- 厚生労働省編『保育所保育指針』フレーベル館、2009 年
- 世界思想 39 号『特集・感性について』世界思想社、2012 年
- 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館、2008 年